連載

中大生の旅するチカラ

観光ジャーナリスト
千葉 千枝子

インターンシップ国際観光コースがスタート
互いを、これからの人生の宝に

中央大学経済学部で20余年の歴史があるインターンシップ。他学部生も履修が可能な3年次4単位の正規の科目で、秋に体験発表会が行われる。インターンシップの受け入れ先には自治体や有名民間企業が名を連ね、多彩な経歴の講師陣とプログラムで構成されている。

そこにこの春、海外インターンシップが3コース、新設された。座学の授業に加え、夏季休暇を利用して海外で職業体験を積むというもので、いずれも独自色が濃い。かくいう筆者も、新設の国際観光コースで、後輩の皆さんに指揮棒を振るうことになった。母校応援団を自任するものとしては、この上ない、やり甲斐ある職務と感じている。

開講に先立ち、海外コース第1期生となる履修者選抜が行われた。3コースともに応募者が多く高倍率で、「世界を舞台に活躍したい」と望む意欲的な学生が、中大に多いことを実感した。

船出した国際観光コースのメンバーは男子9人、女子6人の総勢15人で、さまざまな学部から多様な経歴、特技をもった学生が集まった。この夏、マレーシアのペナン島で、観光の現場に学ぶ。

授業の冒頭、1週間の出来事をおのおの発表させている。これまでの殻を突き破り、物おじせずに意見を述べて、自分を上手に表現できる逸材に育ってほしい。プレゼンテーションスキルを伸ばし、小さくとも目にみえた成果物を遺すことは、きっと将来の仕事や人生に大いに役立つに違いない。そうした導きをゴールと心がけている。次号では、現地海外での実践の様子を、誌面で詳しくお伝えできることだろう。

2014年4月15日に出帆したインターンシップ科目国際観光コース15人の精鋭たち

かつて団体旅行が全盛だった昭和の時代、フィルムカメラで撮った思い出の写真を紙焼きにして交換しあう「写真交換会」なるものが、旅仲間の再会の場だった。メールもデータ送信もない時代、焼いた写真は綺麗にアルバムに収めて持参する人もいて、それぞれの旅への想いが伝わった。また、ツアーの途中では、記念の集合写真を頻繁に撮ったものだ。大きく引き伸ばして団体名や日付を入れてもらい台紙に収めたものを、旅の土産に買って帰る。団体撮影のためのカメラマンもまた、旅行会社が手配すべき重要な業務だった。

近ごろはめっきり、そうした場面をみなくなった。

というより旅先に限らず、日々の暮らしにスマートフォンで、“自撮り”する人が増えている。最新機種にしたので自分も背面カメラにして試してみたが、どうにも若い人のように上手く撮れない。プリクラに慣れた世代だからだろうか。ポーズや目線も抜群で、背景の入れ方といい感心するばかりだ。こうした自撮りや動画もまた、今の時代の旅の情報発信に大きな役割を果たしている。学生たちが自分目線でペナンから、どのような情報発信を行うのか、今から楽しみにしている。

国際観光コース初講日のこと、授業のあとに経済学部棟で、全員でグループフォトを撮った。国際観光コースのキックオフを記念しての1枚だ。声をかけると多くの学生が戸惑ったようで、笑顔もぎこちない。きっと夏には弾け顔で、そして秋には自信に満ちた表情で、写真に収まることだろう。彼らが生涯の友になることは間違いない。切磋琢磨して、互いを人生の宝にしてもらいたい。

略歴　ちば・ちえこ　観光ジャーナリスト。
中央大学経済学部インターンシップ科目国際観光コース客員講師・横浜商科大学非常勤講師。
中央大学経済学部1988年卒。1996年有限会社千葉千枝子事務所設立。著書に「観光ビジネスの新潮流」（学芸出版社）など多数。